

秘宝少年



成人向
FOR ADULT ONLY



「あ、やつと起きたぞ！」

「遅せよっ！なんでコレで起きないんだよ！」

ドツと沸き起こる笑い声に囲まれながら、長瀬悠真（ながせ ゆうま）はむくりと体を起こした。

「……ん？なに？……なんだよ？」

寝ぼけたままだ目をこする悠真は、まだ状況が飲み込めていない。

「ユウマ、とつくに起きる時間だぜ！まあ、まずはそのチンポをなんとかしなきゃなっ！」

再び笑い声に包まれ、悠真は戸惑いながら、自分の股間を見る。

「……っあ！えええっ？」

着慣れない浴衣がすっかり肌臆てしまい、ほとんど裸に近い状態になっているのは、まあ、寝る前から予想していたとおりだったが……。

「……っ？なんでえ？ぼんっはあ？」

何故か、穿いていたはずの下着まで無くなっていて、朝立ちした包茎ペニスガぶらぶらと揺れていた。そして、さらにナニか違和感が……。

「……ああっ！」

良く見ると、亀頭に被った皮に、日のようなモノが書き込まれ、ペニスの付け根には陰毛のようなモノが書かれていた。

「……っ、やりやがったなああっ！ちくしようっ！」

ようやく全てを理解して、すっかり日が覚めた悠真は、悔しさに絶叫しながら布団を叩いた。

そんな悠真を見て、周りにはさらにドツと沸きあがった。

「お前のかわいい亀クン、バッチリ撮れてるからな！後でチームのホームページにアップしとくぜっ！」

「ちなみに、この白ブリを返して欲しければ、そのままオナニーして射精して見せろよっ！」

「ざけんなっ！」

言うが早いのか、悠真は自分の白ブリを持って笑っているチームメイトに飛び掛って押し倒した。

「にやろうっ！」

飛び掛られた少年も、すかさず応戦して、布団の上で取っ組み合いが始まった！

「いいぞ！やれやれっ！」

周りにいるチームメイト達は、面白がって囁し立てるばかりで、誰も二人を止めようとはしない。その他のチームメイト達も、肩をすくめて笑っているだけで、ほとんど関心を示さない。

「こらっ！朝っぱらから騒ぐんじゃねえっ！」

大部屋の襖がパーンと開くと、ジャージ姿のまだかなり若い青年が怒鳴り込んできた。

「監督っ！またユウマが暴れてまあくす！」

「ちよつと待てっ！今回は、オレがヒガイシヤだぞっ！」

悠真が慌てて反論すると、悠真以外全員がドツと笑う。

「今回は、つて認めた時点で、アウトおっ！」

それまで傍観していたチームメイトがすかさず茶化す。

「安心しろっ！悠真に、卓也、良輔に大吉、ついでに誠っ！いつもの悪方キ五人、まとめて今日の試合前にグラウンド五周追加だっ！」

「ちよっ！ついでにつて！オレは今回はナニもしてないよっ！」

ついでにお仕置きを食らった誠は、激しく抗議するが、

「あきらめろ、人生つてそんなもんだぜ？」

監督と呼ばれた若者は、ひらひらと掌を振ってとりあわず、大部屋にいる全員に大声で告げた。

「おらっ！全員さつさと着替えろっ！朝飯食つたら、すぐに出るぜっ！八時からの親善試合が終わつたら、午後からは、今日一日、お待ちかねの自由時間だっ！」

大いに不満顔の五人を除いて、少年達はワツと歓声を上げた。



「くっそ〜！アツ君めっ！」

誠は、わた船にかぶりつきながら、恨み言を吐き出してた。

『アツ君』とは、少年野球チーム『筈ボーイズ』の監督、松木敦のことで、少年達は、本人の前以外ではそう呼んでいるのだ。

まだ大学生で、本来の監督が仕事の都合でほとんど来れなくなったピンチヒッターなのだが、ワンバク盛りの少年達を良く掌握していて、誠や悠真を含め、少年達も信頼している。

しかし、大雑把な性格なので、今朝のようなことも良くあるのだ。

「なんだ、まだ今朝のことを根に持ってるのか？みみっちい男だな！」

悠真は、ご機嫌でチョコバナナを頬張りながら笑った。

他の三人も、それぞれ何かしら口にしながら、誠の肩を叩く。

アツ君言うところの『いつもの悪ガキ五人』で、お祭りの屋台をひやかしているのだ。

悠真達五人を含む『筈ボーイズ』の少年達は、夏休み恒例の、チームの夏合宿で他県の田舎町にある研修施設に来ていた。

ただ、合宿とは言っても、野球は地元チームと親善試合をするだけで、実際は泊りがけでの様々なレクリエーションがメインの行事で、今日は午前中に試合を終えて、昼食後は夜まで自由時間なので、みんな、ちようど開催していた地域のお祭りに繰り出しているのだ。

「あ、あつちの広場でなんか始まったみたいだぜっ！」

無邪気に走り出した悠真の後を、他の四人も肩を竦めて追いかける。

「うおっ！すげえっ！」

悠真の大きな歓声に釣られるように、他の四人の口からも、口々に嘆声が漏れた。

広場の正面にある櫓の上で、中学生だろうか、良く鍛えられた肉体の少年が、禪一丁で大きな太鼓を見事に打ち鳴らしていた。

晴天の中、日の光を浴びている少年は、手足の長い均整の取れた体を、まったく無駄の無い形の良い筋肉が覆い、釣り目がちの整った顔は、まるでど

こかの芸能人のようだった。

そんな少年が、禪一丁に鉢巻という、テレビの時代劇でしか見たことの無い格好で、大太鼓を完璧に打ち鳴らしている、というアンバランスが、都会の小学生である悠真達には強烈なインパクトだった。

そして、うっすら浮かんだ汗で光り輝く全身の筋肉が、太鼓の音とともに躍動する様子に圧倒されていた。

「あれ？アレってやばくねえ？」

しばらくして、五人の中ではいつも冷静な誠が、何かに気づいた。

「何だよ？」

櫓の上の少年から日はずさずに、悠真は気のない返事をする。

「禪、脱げかけてないか？」

「あっ！」

確かに、少年の禪は緩んできていて、ちらちらと陰囊が見えていた。

それからまもなく、無事に演奏は終わり、演者の少年は大きな拍手と歓声に、両手を上げて満面の笑顔で応える。

「タツヒコっ！ハミチンしてるぞおっ！」

そこに、観客の中からついに指摘の声があがり、会場からは違う種類の歓声と嬌声があがった。

しかし、指摘を受けた演者の少年タツヒコは、まったく慌てる素振りを見せない。どうやら最初から自分でも気づいていたらしい。

しかも、大勢の観客を見渡してから、二カツと不敵に笑うと、緩んだ自分の禪に手をかけ、あつという間に手際よく脱いでしまった。

そうして、全裸になって堂々と胸を張る少年の、かなり立派なサイズで、少しだけ皮を被った半剥けチンポが、生えそろう始めた陰毛ともども、日の光の中で大勢の観客の目に晒された。

予想外の展開に、観客からは様々な歓声と嬌声が沸きあがる中、当のタツヒコは、脱いだ禪を右手でくるくると回して笑いながら櫓を降りて行った。





すっかりパニックに陥っている悠真に、美少年は、突然キスをした。たっぷり一分以上、悠真が落ち着くまでそのキスは続いた。

「落ち着いたかい？ 地元の子じゃないよね、名前は？」

「…長瀬悠真。野球の合宿で明後日まで…」

熱に浮かされたようになった悠真は、問われるままに答える。

「そう。僕は、城戸響介（きど きょうすけ）。ユウマ君、お願いがあるんだけど」

「…なに？」

「今日、ここで僕に会ったことは、どんなことがあっても、誰にも言わないで欲しいんだ。理由も聞かないで欲しい」

「…うん、いいよ」

悠真が頷くと、響介はやさしく微笑み、再び悠真の唇にキスをする。

「…約束は守ってね」

「っ！ん、うん！絶対守るよ！約束するっ！」

「…この辺は、暗くなると危ないから、もう戻ったほうがいいよ」

「うん！」

「あれ？…ひよつとしてアレって、オレのファーストキスか？」

舞い上がったまま、ふらふらと森の外に出てきた悠真は、祭りの喧騒に触れて我に返った。

「…オトコとしちゃった。…でも、いいか！」

これも、『ひと夏の体験』とかいうヤツだよな、などとご機嫌になっていると、一転してキビシイ現実が突きつけられた。

「よう！悠真、覚悟は出来たのか？」

「あっ！」

舞い上がって、自分が逃げたことをすっかり忘れていた。

「…おようっ！オトコに二言はねえぜっ！」

悪友四人に取り囲まれ、悠真は観念するしかなかった。

大太鼓を見た後、五人で射的や輪投げなど屋台のゲームで遊び倒したのだが、いつのまにか最下位の人間は罰ゲーム、となっていて、いつもならダントツで勝ち上がる悠真は、面白がって罰ゲームの内容をどんどん吊り上げたのだが、何故か、今日に限って絶不調でダントツの最下位に沈み、まんまと白爆してしまったのだった。

「箭神社祭り子供相撲大会、今年も、優勝記念品の『ごチンボウ』を賭けての勝ち抜き戦です！あつ、笑っちゃ駄目ですよ！この『ごチンボウ』は、箭神社の御神体を完全コピーしたものですから！」

巨大なチンボの置き物を撫でながら、行司役の少年は笑う。

「さて、では第一回戦です！なんと県外からの飛び入り参加ですっ！少年野球チームの長瀬悠真クンと篠原誠クン！」

司会進行も兼ねる行司の少年に呼び出された二人に、というよりは、お面で股間を隠しただけの全裸で登場した悠真に観客は沸きあがった。

「大胆なほうが、長瀬悠真クンです！彼は、今日一日この姿でいる事になっているそうです！」

悠真は、逃げ出したいのを必死でこらえて虚勢をはって笑っていた。

そんな悠真を、行司はたっぷり五分間は弄って場を盛り上げ、さらに、大きな桶のような土俵の上で、二人にワザとらしく握手をさせた。

『キツチリ公開処刑してやるからなっ！』
誠は握手をしながら、ニヤリと笑って悠真の耳元で囁く。

『てめえ…っ、覚えてろよっ！』

「さあ、親友同士でも情けは無用！真剣勝負をしましょう！」
しかし、行司の合図と同時に、あっさり勝負はついてしまう。

「さあ、はっつけよ！のこったっ！」

誠の容赦のない尻アタックが、完全に腰の引けている悠真を吹き飛ばし、紐で括っただけのお面もアッサリ弾け飛んで、悠真のチンボが大勢の観客に披露された。

大撲相供子



「龍彦、お前、結局、ずっとその格好かよ！」

待ち合わせに五分遅れで現れた見崎龍彦（みさき たつひこ）は、昼間に大太鼓を叩いた時と同じ揮姿に、神社の法被を羽織っただけの格好だった。

呆れている響介に、龍彦はりんご飴を齧りながらニヤッと笑うと、石段に剥きだしの尻を下ろす。

「へへっ！慣れると以外と良いんだぜ？涼しいし、動きやすいし」

聞けば、大太鼓で櫓の上からチンポを晒した後も、この禪一丁と法被だけで、祭りの様々な行事の手伝いをしていたのだという。

「苦労様。どうせなら、それも全部フルチンでやればよかつたのに」

「オレはそれでも良かったけどさ！あの後、オッチャン達にめちゃくちゃ怒られたからな！」

龍彦はそう言つて無邪気に笑う。

「：僕らも、もう中二なんだから、幼稚園児みたいにチンポ出して喜んでちやまずいんだぞ」

「うるせー！オトコはいくつになつても子供なんだよ！」

プイッと横を向いて拗ねる顔は、幼稚園の頃とまったく変わらない。

「：はいはい」

保育園からの幼馴染は、肩を疎めて苦笑するしかなかった。

「そういうお前はナニしてたんだよ？大太鼓の後ほ？」

大太鼓の際、龍彦のハミチンを大声で指摘したのは響介なのだ。

「宿題」

「うえっ」

響介の簡潔な応えに、龍彦は苦虫を嘔み潰したような顔になる。

「何も祭りの日までそんなことを」

「祭りじゃなくてもナニもしてないお前には言われたくないね」

響介の冷たい視線と言葉に、龍彦はふと目をそらすと、露骨に話題を変えようとした。

「おっ、花火が始まったぜ！」

そんな龍彦に、響介は軽くため息をつく。そして、一呼吸置いてから、何気ない口調で言葉を続ける。

「：いいけどさ。そういうえばお前、さつき、真裸の、お面でチンポ隠した小生と話してたよな？」

「えっ、ああ、なんだ見てたのか。そうそう、アイツら馬鹿でさ！」

龍彦は、祭りで見かけた小学生五人組について面白そうに話した。何かの罰ゲームで、その中の一人が今日一日、全裸にお面だけで過ごすこと、罰ゲーム解除の条件は、皆の前でオナニーして見せること、などを一気にまくし立てた。

「だから、オナるならいい場所あるぜって、神社裏の物置小屋を教えてやっただ」

「神社裏の物置小屋って、今日はガンガン人が出入りするだろ」

「だから面白いんじゃないか」

悪戯っぽく笑う龍彦に、響介は適当に相槌を打って苦笑した。

下手をすると親よりも龍彦のことを知り尽くしている幼馴染の響介には、龍彦の安易なウソは手に取るように解るのだ。

「：そういうえばお前は将来、でっかい事をするんだよな？ピクピクオトコになつて、テレビに出るんだよな？幼稚園の頃からずっと言つてたもんな？」

「：っ、お、おう？」

「：このまんまじゃ、テレビには出るかもしれないけど、それはバカな犯罪者として出るのが関の山だな。で、顔を隠した僕が、『いつかは何かやらかすんじゃないかと思つてました』とか答えてさ！」

「っな、なんだよそれっ」

幼馴染の冗談めかした言葉に、龍彦は本気で声を荒げた。

「：お前は、自分が思う以上にバカなんだぜ？」

響介は、そんな龍彦の頭をポンポンと叩くと、呟くように言った。

「：響介？」



「アレだ！あつたぞ！」

誠の声に、悠真たち四人も小さく歓声を上げた。

神社の反対側にある森の細い砂利道を五分間ほど進んだ先に、突然、大きな建物が見えたのだ。

「……だけど、どう見ても物置小屋じゃないよな……どっちも」

それは、木造平屋建ての古びた民家と、いかにも後から強引に建て増したような、窓の無いコンクリート造の倉庫のような建物だった。

「あのタツヒコって兄ちゃん、確かにこの小道だって言ったよな？」

「ああ、他に小道は無かった。でも、やっぱりコレは違うよ」

悠真の問いに、誠が断言して、悠真の裸の両肩を掴んだ。

「どうする？やっぱり、戻ってチーム全員にオナニー見てもらおうか？」

「ざけんなっ！」

まだ全裸にお面のみの罰ゲームを強いられている悠真は、一応強がっては見えるが、すぐに黙って下を向いてしまう。

実は、宿舎に戻った後、夕飯の時間にはチーム全員と監督の松木にも知られたのだが、いつもの事だと誰も止めはくれなかったのだ。

そして、強がっていた悠真がついに、もう許してくれと泣きを入れた結果の交換条件は、四人の前でオナニーをしてみせることだった。

そこで、オナニーをできる場所を探して、祭り会場をうろろしていた所に、大太鼓でチンポを晒した少年に声をかけられ、森の中に鍵のついてない物置小屋がある、と教わったのだ。

「……もう、カンベンしてやろうぜ」

誠が、ため息をついて言うと、他の三人も苦笑しながら頷いた。

「まあ、これに懲りたら、大いに反省するように！」

大吾の茶化した言い回しに、悠真はホットした表情で頷いた。

「じゃあ、さっさと戻って悠真に服着せて、出直そうぜ！」

誠の言葉に、全員が戻ろうと踵を返したそのときだった。

「バカヤロウっ！なんとしても龍彦のヤロウを探し出せっ！」

大きな怒声が森の中に響き渡った。

「えっ！」

「んっ？」

驚いて振り向いた悠真たちと、携帯電話を片手に民家から出てきた若い男の目が、合った。

「ちくしょうっ！」

悠真は、自分の両手を背後で縛っている男を涙目ながら睨み付けた。

股間を隠していたお面すら取り上げられて、完全な全裸で跪かされて、両手両足を縛られているのだ。

「ゆうまあっ！」

そして、その横では卓也もすでに全裸で跪かされ、恐怖と困惑にいまにも泣きそうな表情で、縛られるのを待っていた。

「おらっ！お前らもさっさと脱げっ！」

さらに、良輔、大吾、誠の三人も泣きながら服を脱いでいた。

悠真達は今、民家の中の薄汚れた畳敷きの部屋で、拳銃やナイフを持った四人の若い男たちに囲まれ、全裸になるよう命令されているのだ。

「なんでこんな事につ……？」

大吾は、最後の一枚の下着を下ろしながら、涙目でつぶやいた。

「で、こいつらをどうするんだ？アキラ」

五人日の大吾を縛り上げた黒いTシャツの若い男が、携帯電話で怒鳴っていた、白いシャツの若い男に期待に満ちた目で問いかける。

「さて、どうするか」

アキラと呼ばれた男は、ニヤリと笑った。

他の男たちの様子から、このアキラがリーダーらしい。

「それにしても、ミツオ、お前、本当に縛るの上手いな！高二で縄師ってどうよ？このヘンタイめっ！」



アキラの言葉に、黒Tシャツのミツオは笑いながら反論する。

「あつ、ひでえなつ！人間きの悪いつ、家出少年を捕まえちやあ、ガチで拷問して喜んでるエリート進学校の高二に言われたくないぜ！」

二人のやり取りに、他の連中もおもわず笑ってしまう。

「…まあ、今回は目的が違うからな。ここでオレたちに会った事を確実に口封じするのが先だな」

皆が笑い終えると、アキラは一転して冷酷に言い放つ。

「殺しますか？」

拳銃を持った大柄な男がさらりと言い、悠真たちは真っ青になる。

「いや、出来れば避けたいな。それに何のために真裸に剥いたと思う？」

そう言って楽しそうに笑うアキラは、さらに残酷な言葉を続ける。

「ベタだけど、五人とも、生まれてきたことを後悔するくらい恥かしくて辛い日に遭わせて、それを撮影しよう」

「じゃあ、倉庫にあったアレ使おうぜ！どうせ裏切り者の龍彦をとっ捕まえてくるまで時間はあるんだからさ！」

ミツオがますます目を輝かせて身を乗り出す。

「そうだな。でも、まずは自己紹介を兼ねて全員の公開オナニーからだ。調教は順番が大事なんだぜ！」

「間に合わなかったか…？」

「えっ？」

アキラに一人目として公開オナニーを命令され、涙目で自分のチンポを扱き始めていた悠真は、突然、勢い良く開け放たれた襖の向こうからの声に驚いて手を止めた。

そこには、なんと、昼間に森の湖で会った美少年が立っていたのだ。

「何だお前はっ！」

拳銃を持った男が銃口を向けながら怒鳴りつける。

「見崎龍彦の友人の城戸響介だ。事情は全部知っている。その子達はまったく関係無い！返してやってくれ！」

白と青のプリントTシャツにハーフパンツ姿の響介は、銃口を向けられても怯むことなく、アキラの目をまっすぐ見て強く言った。

「…なら、お前が本物の『ごチンポウ』の場所を知っているのか？」

「いや、それは知らない。龍彦に聞いてくれ」

「話にならないな。そもそも、このガキどもは、俺たちの存在と顔を知っている以上、ただでは返せない」

「口止めなら、チンポの写真でも撮っておけば十分だろう」

「そうはいかないな。こういう場合、画像と同時に、俺たちに対する強烈な『恐怖』も与えないと効果が無いものなんだぜ。覚えときな」

「…なら、僕をどうにかして、この子達に見せればいい」

「へえっ！お前が身代わりになるってのか？」

「ああ。あのバカのために、無関係な子供たちを犠牲にしたくない」

「ふん。おもしろいな。…脱いでみる。もちろん全部だぞ」

「へえっ、こりや、とんだ上玉だっ」

ミツオの感嘆の声に、アキラも下卑た笑いで応える。

「いいだろう。ガキどもの替わりに、お前を『調教』してやる。まずは服従の証に、オナニーして見せる」

「っん、あつ…」

白らの勃起したペニスを扱く、クチュクチュと淫猥な音が和室に響きわたる中、響介は、アキラの命令で自分の指をアナルに入れた感覚に溜まらず声を漏らした。

アキラ達四人に悠真達五人、合わせて九人に見られながら、響介は全裸で公開オナニーをしていた。

最初は嫌しただっていたアキラ達も、美少女アイドル以上の美少年が、うっすらと汗の乗った艶やかな白い肌と、芸術品のような肉体の全てを晒してチンポを扱く痴態に、黙って見入ってしまった。



「邪魔だ」と床の間に「置かれた」悠真も、大切なものを汚された思いに泣きながら、自分のチンポを扱っていた。

「…んっ！」

始めてから約五分後、小さく息を呑み、響介は勢い良く射精した。

「最高だよコイツっ！アキラ、コイツを徹底的に撻ろうぜっ！」

ミツオの興奮した声に、アキラは苦笑しながら携帯を閉じた。

「ああ。だが、残念ながらお楽しみは後だ。龍彦を捕まえたそうだ」

「ぐあああっ！」

響介の公開オナニーが行われた古びた民家の隣にある、窓の無い倉庫のような建物の扉が開いた瞬間、若い男の絶叫が、悠真達と響介の耳を襲った。

「うわっ！」

中に入り、絶叫の主を見た悠真達は、想像もしなかったその光景に言葉を失う。

そこには、自分達にここを教えたあの龍彦が、全裸で犬の首輪を嵌められて、木の柱のほどに縄で括り付けられていた。

そして、その状態で木製の木馬に跨がされていて、全体重が股間にかかるように調節されているのが、悠真にもすぐわかった。

しかも、そのかわいらしいデザインの木馬の背中は、禍々しく残忍な凹凸のついた金属で覆われていて、その金属の山が龍彦の股間を苛み、窪みに嵌った二個の睾丸が龍彦自身の体重で圧迫されていた。

「なんだ、もう始めてるのか？」

悠真達と響介を、全裸のまま連れてきたミツオは不満げに言う。

「いや、今準備が終わったところだ。せっかくだから、尻にローターを入れて強制勃起させてみたところさ。半刺けの癖に、勃起したらずいぶん生意気な大きさで形だぜ？」

アキラは、龍彦の勃起して剥け上がった亀頭を指先ではじいた。

「響介っ？なんでお前がっ！」

ようやく響介達に気づいた龍彦は、日に見えて顔色が変わった。

「お前の処刑を、お友達にも見せてやろうと思ってるな！特にこっちの美少年はお前の親友なんだって？バカなお前のせいで、俺たちに最高のオナニーを見せてくれたぜ？」

「なんだとっ！響介は関係ないっ！何もするなっ！」

「…言っただろう？お前は、自分が思う以上にバカだっ！」

響介は、全裸で後ろ手に縛られていながら、いつもどおりの落ち着いた表情と口調だった。

「お前の浅知恵は全て破綻した。あきらめろ」

「響介っ！」

「ふんっ！親友のほうがよっぽど状況を理解しているようだな。もう一度聞けど。本物の『ごチンポウ』はどこだ？」

「知らねえよっ！」

「そうかい、それは良かった。じゃあ遠慮なく拷問だ！」

心底嬉しそうな顔で、アキラは木馬についたハンドルに手をかけ、勢い良く回した。

「ううぎやああっ！」

龍彦の一段と大きな悲鳴が倉庫全体に響き渡る。

ハンドルを回転させると、クランクシャフトの応用で木馬が激しく上下して、金属の刃が龍彦の股間と睾丸を奇烈に殴打するのだ。

「おらおらおらおらあっ！」

アキラは断続的に、しかしほとんど間をおかずにハンドルを回し続け、龍彦のペニスはぼんぼんと跳ねて、透明な粘液を撒き散らした。

そして、龍彦は五分と持たずに失禁し、失神した。



「しかし、この倉庫の中がこうなっていたとはね。あの爺さん、発明家取りの変人だと思ってたけど、本当は何を考えていたんだか！」

龍彦と同じ大用の首輪を自分でつけさせられながら、響介があきれた素振りで倉庫の中を見渡すと、悠真達もようやく周りに日が行くようになり、改めてその異常な空間に困惑する。

学校の体育館の半分くらい窓の無い空間に、龍彦が乗せられているような、木製の怪しい機械が大量に置かれていた。ほとんどの使い方は解らないが、同様に禍々しい目的の機械なのは悠真にも解った。

「なんだよこれ！」

「『少年秘宝館』らしいぜ？」

「……ヒホウカン？」

失神した龍彦を木馬から降ろしながら答えたミツオの言葉に、悠真は意味がわからずキョトンとする。

「まあ、普通はわからないよな」

どういふ風の吹きまわしか、アキラが苦笑気味に話を引き継いだ。

「しかも、実際の秘宝館とは少し違うからな。……入院してるココの持ち主の爺さんは、自分が作った少年責め専用の拷問機械、本人は『カラクリ淫具』って書いてたけどな、で、博物館を作るつもりだったらしいぜ。それも、本当に少年を拷問して見せるつもりだったらしい」

「なにそれ……」

荒唐無稽な話に、誠は啞然としてつぶやいた。

「まあ、さすがに実際は、『死ぬまでにいつか実現したい夢』だったようだけどな。龍彦が隠したはずの『ごチンポウ』を探して家捜してたら、手の込んだ『事業計画書』が出てきたよ」

「もったいない話だよな！機械は実際に良く出来てるんだから、もっと早く俺達に言えば、家出少年とかで活用しまくってやったのに！」

ミツオは完全に本気で残念がっている。

「……まあ、それは今回の件が全て済んでから考えよう」

アキラは肩を竦めて笑うと、龍彦を探していた三人も含め、総勢六人の手下に小声でいろと指示を出しはじめた。

「おらっ！起きろっ！」

木馬から下ろされ、コンクリートの床に仰向けに転がされた龍彦にバケツの水がぶちまけられた。

「いつまでも寝てるんじやねえぞ！さっさとチンポおっ勃てるっ！」

「……っんあ、……くそうっ」

水を被って目を覚ました龍彦は、大きく息を吐いて呻いた。

「『カラクリ淫具』はまだまだあるんだっ！だから、お前のチンポがぶっ壊れる前に、セックスさせてやるぜっ！お前の親女のケツでなっ！」

「っん……あっ」

ミツオの言葉に龍彦が慌てて身を起こすと、首輪をつけた響介が犬のように四つん這いになって、尻の穴を自分に向けていた。

「響介っ……冗談じゃねえっ！そんなことできるかっ！」

「やっばり一人くらい殺さないと駄目か？」

「なっ……」

見ると、響介の頭には拳銃の銃口が向けられていて、周りの五人の小学生にもそれぞれ、ナイフや拳銃が向けられていた。

「……龍彦、今はどうしようもない。ヤレよ。お前の粗チンなんか、入れたのも解らないさ」

響介は、振り向くと、いつもどおりの表情と口調で軽口を叩いた。

「……響介っ、……あう」

龍彦の尻の中のローターが再び激しく動き出して、強制的に勃起させられて天を衝いたベニスは、粗チンとは程遠い立派なものだった。

「さっさとぶち込めよっ！美少年のケツの穴は、お前が寝ている間に、オレが、じゅっくり解しておいてやったから、準備万端だぜ！」

「なっ……！」

確かに、見ると響介のアナルはすでに濡れて艶かしく息づいていた。



「へへっ、これが証拠写真だ」

ミツオが得意げに見せ付けたデジタルカメラの画面では、響介のアナルに、誰かの左右の人差し指が深く入れられていて、ぼっくりと左右に開いたアナルの中のピンクの腸壁がはつきりと晒されていた。

「……くそおっ！」

親友を辱められて、龍彦は悔しさに顔を歪めた。

「ようやく、いい顔になったな」

黙って見ていたアキラが、龍彦の頭を拳銃で小突きながら笑う。

「大切な親友が殺されたくなければ、その親友のケツを犯せ！お前のでかいチンポをぶち込んで、最低二回は腹の中で射精しろ」

「ちくしょうっ！」

「タツヒコっ！」

激昂しかかった龍彦を、四つん這いのままの響介が、鋭く制止する。そして、龍彦の日を見ながら、もう一度ゆっくりと名前を呼んだ。

「たつひこ、駄目だぞ」

「……おう」

龍彦は、一瞬だけ泣きそうな顔になって肩を落とすと、次の瞬間にはアキラを睨み返した。

「やってやらあつ！響介、行くぜっ！」

そう言って一気に響介のアナルに完全勃起したペニスを突き入れた。

「ああっ」

響介はたまらず吐き出すような悲鳴を上げる。

「あ、ごめっ」

「……っ、このバカっ」

「ごめんっ、でもコレって！ああっ」

龍彦は、拳銃を突きつけられ、しかも十人以上の人間に囲まれながら、全裸で、親友の尻にチンポを入れるという異常な状況と、生まれて初めてのリアルセックスの快感に頭の中がごちゃごちゃになった。

そして……

「あつ、もう出るっ！」

挿入から一分も持たずに、響介の直腸内に射精してしまう。

「早えっよっ！」

どっどアキラ達は腹を抱えて笑う。

「早すぎだぜっ！今のはノーカンだ！あと二回出せ！」

その後もさらに、アキラ達の嘲笑の中、龍彦と響介の親友同士の不器用なセックスは続けさせられた。

主にミツオの指示で、様々な体位や愛撫をやらされ、龍彦は、親友の肉体を隅々まで味わって、さらに三回、その腹の中で射精した。

「しっかし、コレじゃ全然おしおきじゃ無いじゃん」

「まったくだ。むしろ授業料を貰わないとな！」

龍彦を服従させて気が大きくなったのか、アキラ以外の連中は無駄口が多くなり、その会話から悠真達にもいろいろ状況がわかってきた。

エリート進学校の高校二年生のアキラを中心に、同学年三人、高校一年生三人、中学三年生一人のグループで、どうやら、中学からの仲間で、今まで

もいろいろ悪事を行ってきたらしい。

しかし、肝心なことはどうしても判らなかつた。

「……なあ、なんで『ごチンポウ』なんだ？あの、でかいチンポの置物がどうかしたの？タツヒコ兄ちゃんが隠したってどういうこと？」

「っあ、ばか、悠真やめろっ」

龍彦と響介の公開セックスがひと段落したところで、それまで、ナイフを突きつけられながらただ傍観するだけだった悠真が、我慢できずに溜まりまくった疑問をアキラ達にぶつけた。

せつかく蚊帳の外に置かれているのに、自分から存在をアピールしてしまった悠真に、他の四人の小学生は天を仰いだ。

「そうだな、じゃあ、響介って言ったか、そこの美少年君に説明してもらお

うか。…実際、お前がどこまで知ってるのか確認したい」

アキラに指名された響介は、初めてのセックスに消耗した体コンクリートの床からなんとか起こして、ゆっくりと簡素に答えた。

「『ごチンポウ』は、箭神社の御神体のことだ。ユウマ君の言っているのは尻相撲の副賞のレブリカのことだろう。本物の『ごチンポウ』は神社の神殿の奥に安置されていたんだけど、それを、彼らが盗みだして、この民家に隠した。そして、それを龍彦が横取りしたんだ。」

「でも、ゴシントンタイプって、結局、チンポの置物だろ？」

悠真はやはり納得がいかない顔で首を傾げる。

響介は苦笑しながらさらに続けた。

「たぶん、話を持ちかけたのは龍彦のほうだ。箭神社の御神体が、実は純金製のものに、誰も知らなくて、警備は無いに等しいという事実は、地元の人間ですらほとんど知らないからね。しかも、隠し場所に、神社裏から森伝いに入れて、家主がちょうど入院しているこの家を使うなんて、よそ者には絶対無理だ」

「…なんでオレ達を？ウソについて、オレ達をココに来させたんだ？」

「部外者が現れれば、慌てて逃げると思ってたんだろ。このバカは」

龍彦は害虫を嘔み潰したような顔で視線を逸らした。

「…やれやれ、マジで全部知ってるようだな」

アキラは呆れ顔で肩を竦めた。

「じゃあ、そろそろ『ごチンポウ』の在り処を吐いてもらおうか」

アキラの合図で、龍彦と響介は再び取り押さえられた。

「響介は関係ないっ！拷問したければオレを好きにだけしろっ！」

「おっおっ！麗しい友情だねえ」

龍彦と響介の二人は、全裸に首輪のまま、両手を縛って吊り上げられ、龍彦は右足首を、響介は左足首を床に固定されていた。

そして、それぞれ残った側の足を、膝にかけられた縄で持ち上げられて片足立ちを強要されていて、現在はアキラが龍彦の、ミツオが響介の、その持ち上げた足をかなり高く抱えて支えていた。

「俺らがこの手を離したらどうなるか、わかるよな？」

ミツオは、心底楽しそうに、ローターで強制勃起させた響介のペニスの龟头をもみ潰した。

「…持って五分かな…」

響介はらしくなく絶望的な表情で呟く。

彼らの持ち上げられた足にかけられた縄は、天井と床の滑車を經由して、それぞれ相手の淫囊の根元に括りつけられているのだ。

つまり、ミツオ達が手を離して響介達の足が下がると、相手の辜丸が激しく下に引つ張られ、苛烈に責められるのだ。

それを防ぐにはお互いに足を高く上げ続けるしかないが、こんな無理な体勢では一分と持つはずがなかった。

結局、親友同士で、残酷な辜丸責めをしあうことになるのだ。

「へへっ、この装置は『鋼の友情』って名前らしいぜっ！お前らにびったりじゃないか！じゃあ、いくぜっ！おらっ！」

ミツオの掛け声にあわせ、アキラも同時に龍彦の足を離した。

「『うおおおっ』」

一分と経たずに、龍彦と響介の絶叫が同時に倉庫の中に響き渡った。

二人とも必死に足を上げているのだが、元々の設定が厳しいため、すぐにお互いの淫囊を引つ張り合ってしまった、辜丸が縊り出された。

そして、激痛に思わず腰を落とすと、さらに相手の辜丸を引つ張ってしまった、なんとか足を上げようと身じろぎすると、かえって相手の辜丸を断続的に引つ張ってしまうという具合に、お互い、延々と辜丸を痛めつけあう無限ループに入り、絶叫しながらのた打ち回った。

強制勃起させたペニスを振り回しながら、泣き叫んで、踊り狂うようにのた打ち回る二人を、アキラたちは爆笑しながら囃したて、悠真達は悪夢を見る思いで見守った。





「へへっ！尻の穴までバツチリ丸見えだ。いい眺めだぜキョウスケ！」

ミツオの下卑た笑いに、響介は無言で睨んだ。

響介は木製の台に大きく足を開いて座らされ、固定されていた。

両腕は、頭上で、高さ調節機能のついた一枚の木製の木製の足枷でそれぞれ拘束され、界まで引き上げられ、両足も、左右二枚の木製の足枷でそれぞれ拘束され、腰を突き出すような体勢で限界まで引き上げられている。

そして、突き出したアナルには、凶悪な張り形が向けられていた。

「じゃあ、逝こうか！」

「うっ、ああっ！」

響介のアナルに、凶悪な突起の付いた、黒光りする金属製の張り形が一気に挿入され、根元まで響介の腹の中に押し込まれる。

その張り形は、ハンドルの付いた円盤に接続されていて、ハンドルを回すとピストン運動するように作られていた。

「へへっ、よしよし、全部入ったじゃないか。才能あるよお前」

ハンドルを回したミツオは、満足げに笑う。

「…おいつ、何をしてるんだ！止めるっ！もう全部じゃべったじゃないか！やめろおっ！」

意識を失ったまま両手両足を縛られて、コンクリートの床に転がされていた龍彦が、響介の悲鳴で目覚めて、慌てて叫ぶ。

龍彦は、過酷な率丸責めに三十分近くの間打ち回った末に、ついに観念して『ごちんポウ』の隠し場所を白状していた。

その後、二人そろって金玉を蹴り上げられて気絶していたのだ。

「ようやく起きたか。勘違いするな。コレは単なる暇つぶしさ。お前が隠した『ごちんポウ』を、仲間が確認するまでの間だな」

アキラは、爽やかな笑顔で、残酷に言い放つ。

確かに、七人のうち、龍彦を捕まえた三人の姿が見えない。

「だったら、オレを虜ればいだろうっ！響介は関係無いんだ！」

「ミツオが、こっちの美少年君のほうが良いんだとさ」

肩を竦めながらそう言うと、アキラはミツオを見て小さく頷く。

「こんな上玉を、すき放題翫れるチャンスはそう無いからな！」

ミツオは心底嬉しそうに笑うと再びハンドルに手をかけた。

「響介っ！」

龍彦の悲痛な叫びに、響介はいつもの苦笑気味の笑顔で応えた。

「っぐあああああっ！」

ミツオがハンドルを勢い良く回し始めた。

響介の直腸内にあつた金属製の張り形が激しくピストン運動をして響介のアナルを深く出入りし、グチョグチョと淫猥な音が倉庫内に響き渡った。

そして、龍彦が四回も注ぎ込んだ精液が、その張り形の動きに合わせて溢れだし、響介のアナル周りを粘液で汚していく。

「っはあああっん、ああっ」

その巨大な圧迫感が腹を出入りする感覚に、響介は悶絶し、呼吸を荒げながら耐える。

前立腺を抉られ続け、強制的に勃起したペニスからは、透明な粘液がとめどなく漏れて、響介の腹を濡らしていった。

「うん。さすがにコレだけで射精は無理か？改良の余地有りだね」

十五分以上、断続的にハンドルを回したミツオは、いつまでたつても射精しない響介のチンポを見て、少し残念そうに呟く。

そして、おもむろに張り形を響介のアナルから抜くと、自分の右手の指を三本、響介のアナルに押し込んで、左手でペニスを握った。

「…オレの手の中で射精して見せるよ」

絶妙な愛撫で、響介は二分と持たずに射精させられた。

「んんっあああ！」

「へへっ、やっばお前、最高だぜ」

ミツオは、響介の精液を舐めながら、満面の笑みを浮かべた。



「この子達にはっ、ユウマ君達には手を出さない約束じゃないかっ！」

悠真が、別の木製の台に四つん這いで拘束されるのを見て、響介が初めて声を荒げて抗議する。

悠真は、首と両手首を同時に拘束する木製の枷に嵌められ、尻を高く掲げる体勢で両足を開いた形で左右それぞれが、木製の枷に嵌められていた。

首と両腕を固定する枷と、両足を固定する枷はその間の距離を調整できる仕組みで、最適な体位で固定できるようになっているのだ。

「言っただろ？これはもう、ただの暇つぶしだ。『ごチンポウ』とは関係ないただのお遊びさ！」

アキラは悪びれずに言い放つと、すぐに何かを閃いた表情を見せ、自分を睨みつける響介を、意地の悪い笑顔で覗き込んだ。

「…そんなに心配なら、お前がやってやれよ。やさしくさ」

「え？」

「ほら、さっさとアナルバーজনを貰ってやれよ！やさしくな！」

「っ！」

ミツオは、悠真の尻の前に立たされた響介の尻をパンと叩いた。

アキラは、器具に固定されてアナルを晒している悠真を、響介が犯すように命令したのだ。

もちろん、拳銃を突きつけながら。

さらに、卓也、良輔に大吾、そして誠の四人も、悠真のすぐそばに集められ、直近で悠真が犯されるのを見るように命令した。

「良く見ておけよ。お前ら全員、順番に犯すからな」

四人は、龍彦と響介への性的拷問を延々と見せられるという異常な状況のためか、全員が包茎チンポを完全勃起させてブラブラと揺らしていたが、ついに自分たちの身に降りかかってきた恐怖に顔を歪めた。

「ユウマ君…」

響介は、無念さに満ちた表情で声をかけた。

「…キョウスケ兄ちゃん、いいよ、やってくれ！オレ、キョウスケ兄ちゃんならいいや！…本当は、オレが、キョウスケ兄ちゃんのお尻にチンポ入れたかったけど、それはまた今度ね！」

悠真は、回らない首を精一杯向けて、笑顔で響介を見た。

「ユウマ君っ、…ああ、いいよ。今度入れさせてあげるね」

響介は、健気な悠真の振る舞いになんとか笑顔で答える。

「じゃあ、いくよ」

「おうっ」

響介は、やはりミツオが解して濡らした悠真のアナルに、自分の勃起させたペニスの龟头をそっと宛がった。

その感触に、悠真はビクツと体を震わせた。

「ユウマ君、難しいだろうけど、お尻の穴の力を抜いて」

「んっ」

悠真は大きく息を吐いて、なんとか応えようとする。

「…入れるよ」

「あんっ」

響介の龟头が、悠真の小さなアナルにゆっくりと埋められていく。

「うううううっ」

悠真は呻きながらも必死にその圧迫感に耐える。

「面倒くせえなっ！一気に逃げよっ！」

響介のペニス半分まで入った所で、いきなり、ミツオの足が響介の尻を蹴飛ばして、響介のペニスが一気に根元まで悠真のアナルに挿入された！

「っひあああっ！」

悠真の絶叫が倉庫に響き渡り、押し出されるように、悠真の包茎ペニスから精液が発射された。



「さて、次はどいつにしようか？」

ついに泣きだした悠真の直腸内に、響介がやむを得ず射精したのを確認すると、アキラは残りの四人を残忍な笑顔で見回した。

そして、恐怖に震える四人の中から、短髪の大吾の頭に手を置いた直後、アキラの胸ポケットの携帯が鳴った。

「…OK、よくやった。」

短い会話で携帯を畳むと、一番年下の手下に「ご機嫌で指示した。」

「扉を開けてやれ！お宝が着いたぞっ！」

「さあ、愛しの『ごチンポウ』さまだっ！」

アキラは、大きなリュックサックから、ゆっくりと、新聞紙で包まれたかなり重い物体を取り出した。

そして、丁寧に新聞紙を剥ぐと、黒光りしている巨大なチンポの置物が現れた。本物の、『ごチンポウ』だ。

レプリカとは、大きさは同じでも重量感と質感がまったく違う。

「間違いない、オレ達が盗ったやつだ」

アキラ達は、満足げに頷き合った。

「…これで、お前たちともお別れだな」

ミツオは本気で寂しそうな顔でつぶやく。そして一転して、ニヤリと笑ってアキラを見た。

アキラも、同じような含み笑いをして仲間達を見る。

「…そうだな。幸い、ちょうど七人ずつだしな。別れを惜しんで、楽しいパーティーを開こうぜっ！」

「待つてましたっ！」

アキラの言葉に、仲間達は歓声を上げながら、すぐに全裸になった。

アキラ自身を含め、高校生六人と中学生一人の七人全員が全裸になり、その股間では完全勃起したペニスが天を衝いて下腹を打っていた。

アキラ達七本のペニスに囲まれた悠真達は、白らの運命を、悟った。

「ははっ！こりやあいいや！最高だっ！」

「ううがああっ！」

アキラの高笑いや龍彦の悲鳴が同時に倉庫に響き渡った。

龍彦は、亀甲縛りにされて天井からスプリングで吊るされ、さらに、大きく開かされた両足首は、スプリングの付いた丁字型の金具で床に繋がれているため、上下から重量が相殺されて、ほぼ無重量で中空に浮いてアナルを晒している状態だった。

さらに、悪ノリしたミツオによって、龍彦はチンポまで亀甲縛りにされてしまい、射精できないばかりか、睾丸も紐で縛られている。

その龍彦のアナルに、アキラは七人の中で一番太くて長いペニスを一気に突き入れたのだ。

しかも、重量感がないことを生かして、ペニスを深く入れたまま、龍彦の体を縦横無尽に動かして、まるで龍彦の直腸をただの『肉袋』のように扱って快感を貪っていた。

だが、アキラの高笑いや龍彦の悲鳴も、すぐにかき消された。

アキラが龍彦のアナルに挿入するのを合図に、他の六人もそれぞれ少年たちを犯し始めたからだ。

ミツオは、ずっと執心していた響介の肉体を貪り、他の五人も、泣き叫ぶ悠真達五人の少年を情け容赦なく犯した。

アキラ達の『強姦パーティー』は二時間以上続き、龍彦や響介はもろろんのこと、悠真達も全員、複数の男に犯され、直腸内に射精され続けた。

倉庫の中は、十四人の少年達の汗と精液の匂いが充満し、悲鳴と鳴き声が溢れた。

そして最後は、龍彦たち七人全員を床に並べて、精液と小便を浴びせかけて記念写真を取るといふ、残忍な儀式で幕を閉じた。



「ちくしょうっ！出せっ！ココから出せよっ！」

鉄格子に取り付いた全裸の龍彦は、力任せに鉄格子を揺すってガチャガチャと鳴らしながら、目の前のアキラ達に怒鳴った。

龍彦の背後では、疲労困憊し表情も空ろな悠真達五人が座り込み、響介はさすがに疲れた様子ながら、呆れた顔で龍彦を見ている。

「：お前は、まだまだ元気だな。：正直驚いたよ」

すでに、服を着ているアキラは、本当に驚いた顔で龍彦を見る。

延々と続いた拷問と輪姦で、龍彦の体はあちらこちらに縄の痕がつき、全身は精液と小便に塗れていた。

さらに、何人もの男に精液を注ぎ込まれたアナルからは、溢れた精液が漏れ出してもいた。

実際、今回拷問された七人のなかで、間違いなく一番過酷に責め立てられたのは龍彦のはずなのだが、その日はまだ生気に満ちていて、肉体的にもほとんど消耗した素振りを見せていないのだ。

「まあ、カラ元気にしても、たいしたもんだぜ！もう会うことも無いだろうが、達者でなっ！」

アキラは、嫌味なくらい爽やかな笑顔で片手を挙げて、立ち去った。

「あ、そうそう、コレを忘れてた！」

一分間も経たずに、ミツオ一人が戻ってくる。

『大売出し！ただし、使用済み（笑）』

そう書かれた張り紙を鉄格子に張った。

「安心しろよ。ちゃんと後で救助が来るようにしてやるよ。セックスゴシップで悪評高いネットニュースの記者だけだっ！きつと、お前らのことを面白おかしく記事にしてくれるぜ！」

そう言って笑いながら走り去る。

「ちくしょうっ！おぼえてろっ！」

龍彦の怒声が、倉庫の地下牢に空しく響いた。

「：ちくしょうっ！」

アキラ達が立ち去ると、龍彦もさすがにぐったりと座り込む。やはり、カラ元氣、虚勢だったのだ。

「：タツヒコ兄ちゃん。なんでこんなことしたの？」

悠真のまっすぐな疑問に、龍彦は、つぶやくように答えた。

「：いつかデカイことをするために、軍資金が欲しかった。『ごチンポウ』

の事は、田舎町なりに最高機密なんだけど、オレ達はひよんな事から知ってたんだ。で、街に遊びに行ったときに、アイツらの一人と知り合って、つい口を滑らせて：」

そこまで無表情だった龍彦は、耐え切れなくなったように顔を歪めて、泣きそうな表情で響介を見ながら訴えた。

「でもっ！すぐにヤバイって思ったんだ。駄目だって。あんなやつらに『ごチンポウ』を好きにさせちゃ駄目だって！だから、オレっ、横取りって言われたけど、オレはちゃんと神社に返すためにやったんだ！」

「：わかってる。言っただろ？お前はバカだって。お前の考えていたことも、やろうとしていたことも。そして、それが失敗することも。全部判ってた」

響介は、やさしい笑みを浮かべながら、龍彦の頭を撫でた。

「：でも今回は、まったく無関係のユウマ君たちを巻き込んでしまった。僕のことはいいけど、彼らには謝っても謝りきれないんだぞ？」

「ああ：そうだな。そうだ：」

龍彦は、慌てて、その場で土下座して悠真達に頭を下げた。

「ごめんなさいっ！許してくれとは言わないけど、ごめんっ！」

だが、突然、謝罪された悠真達は、正直困惑するばかりだった。

「：お詫びは後でゆっくり考えよう。とりあえずココを出ようか」

「え？」

「この地下牢も少年秘宝館の一部なら、所詮、見掛けだけのはずだよ」

そして、実際に、鉄格子の一部が簡単に外れるようになっていた。

大売出し!

在栏し使用済(笑)



「ここって……」

「そう。僕とユウマ君が初めて会った場所だよね」

「え？ どういうことだ？」

悪夢としか言いようのない一夜の翌日、早朝から、悠真と響介、そして龍彦の三人は、森の中の湖の畔に立っていた。

昨晚、なんとか地下牢から逃げ出した七人は、響介の『大丈夫。みんなに迷惑をかけることは絶対無いから』という言葉を信じて、今回のことを秘密にすることに同意していた。

そして、その大丈夫な理由を説明するから、と翌朝に待ち合わせていたのだが、悠真以外の四人は、心身のダメージから回復できず、悠真が皆を代表して来たのだ。

「じゃあ、湖に潜るから脱いで」

響介はそう言うと、自分はあるという間に全裸になってしまう。

「どうしたの？ まさか、いまさら恥かしいって仲でもないでしょ？」

最初は少し戸惑った龍彦と悠真も、苦笑して全裸になった。

『〇△□×っ！』

思った以上に透明度が高く、朝日が程よく差し込む湖底の美しい景色に、悠真は身振り手振りではしゃいだ。

全裸で湖に潜った三人の股間では、ペニスがふらふらと揺れていて、正直すこし間抜けな感じだったが、かえって親近感があったて悠真は嬉しかった。

『っ！ ☆☆☆っ！』

そして、響介が湖底に跪いた場所を見て、驚きのあまり、思わず空気を吐き出してしまった。

龍彦も、呆然と目と口を開いている。

ちよっとだけ得意げな表情の響介の前には、笥神社と書かれた巨大なチンポがあり、その龟头は、金色に輝いていた。

そう、あの『ごチンポウ』があったのだ！

「それじゃあ、やっぱりアレが本物の『ごチンポウ』なの？」

「そういうこと。水で塗料が剥げちゃったけどね」

湖から上がって、全裸のまま体が乾くの待ちながら、響介は龍彦と悠真に話し始めた。

「祭りが始まってすぐに、龍彦が、ヤバイ連中と関係を持って、『ごチンポウ』を狙ってるのが判ったから、慌てて、すぐに本物をココに隠したんだ。その際にユウマ君に見られちゃったんだよね」

「じゃあ、盗んだ時点で偽物だったってのか？」

龍彦は複雑な表情だ。

「うん。レプリカに砂をつめて、光沢を出す塗料を塗っただけの物なんだけど、良くできてただろ？」

ニヤリと笑う響介に、龍彦はますます複雑な表情になった。

「あとは、頃合を見て、元に戻せばいい。剥げた塗料も塗らないといけないけどね」

「『ごチンポウ』の件が大丈夫なのはわかったけど、アイツらの件はどうなるの？ 偽物だって判ったら、また来るんじゃない？」

「思い出したのか、悠真は泣きそうな顔になる。」

「それも大丈夫。ひよっとすると、アイツらはもう、この世にはいないかもしれないよ」

「えええっ？」

「どういうことだよ」

黙って聞いていた龍彦も身乗り出した。

「『ごチンポウ』みたいな物を、こっすりお金に換えるのは大変なんだ。輸送の際に聞きだしたけど、かなりヤバイ暴力団と取引するらしいから、砂の詰まった偽物なんて持っていったら……」

響介は、それ以上は言葉にしなかったが、その意味は龍彦と悠真にも良く理解できたので、それ以上は何もいえなかった。



「ちよつと待ったあゝ！」
「待ったなあゝし！」

龍彦の要求は、悠真に即効で却下された。

「いやいや、マジでまずいだろコレは！」

「ナニが？」

「何がって、中学生にもなつて、チンポモロだしはまずいだろ！」

「タツヒコ兄ちゃんの場合は、もういいでしょ。いくら出しても」

「なんだそりゃ！」

龍彦は、祭りの出店のひとつだった、射的の屋台の台に全裸で載せられて、M字開脚の形に縄で拘束されていた。

そして股間では、ローターをアナルに入れられて、強制勃起させられたペニス下腹を打っている。

「往生際が悪いぞ龍彦。潔く処刑されな」

「響介っ！だいたいお前、なんで亀甲縛りなんだよ！」

さらに、響介の手によって亀甲縛りにされて、上半身も柱にくくりつけられようとしているのだ。

「昨日のお前、似合つてたからさ」

「ざけんなっ！」

「いたつてマジメです」

響介は、いつもの静かな笑みを浮かべながら、手際よく龍彦を柱に括りつけていく。

「…これで許してくれるっていうんだから、潔くしなよ」

これは、悠真達を巻き込んだ事への罰ゲームなのだ。

「いや、でも、かなり過酷だぞ？コレは」

「僕に言わせれば、お前は金玉潰されても文句は言えないよ？」

「…ちくしょう…」

響介の突き放した言葉に、龍彦はがっくりとうなだれた。

「さあさあ！見てつて！やってつて！本日限りの特別出店！イケメン男子中学生の金的射的ゲームだよ！的は、文字通りの金的、このイケメン兄ちゃんの金玉だひとつ！あつ、二つだった！」

ベタなギャグだが、周りのお客からはドツと笑いが起こった。

悠真の名調子もあつて、面白がりの客がどんどん集まってくる。

「…マジかよ？皆どうかしてるぜ」

龍彦は、予想外の展開に青くなつてつぶやいた。

「ノルマは、金玉を二百発のコルク玉で撃たれることだったよね。この調子なら楽勝だね。まあ、がんばつて！」

響介は苦笑しながら龍彦に耳打ちした。

最初の客は、当然、悠真以外の四人、卓也、良輔に大吉そして誠だ。

それに店側の悠真も加えて五人の銃口が龍彦の金玉に向けられた。

「せうのっ！ふあいやくっ！」

悠真の合図で、五人全員の銃口が同時に火を噴いた。

「つてええっ！」



夏コミへお越しの皆様 (たぶん) 猛暑の中ご苦労様～
 いつもお世話になっております イラスト担当の筍屋です(^-^)/
 この度は この本をお手にとって頂き 本当に有り難うございましたm(_ _)m
 今回は 夏っぽい物と事前に話していたんですが
 どこをどう曲がったのか 禪+お宝+罰ゲーム物となってしまいました(笑)
 相変わらずのスケジュール管理不足で あれこれ穴だらけですが
 何か一枚でも 皆様のお気に入り絵を見出していただけ
 今年の暑～い夏を乗り切るパワーの一助にでもなれば 幸いです♪

2010年8月15日 筍屋

追記

このページの背景少年大吾くん
 個人的にお気に入りなのでモブ脇役ですがピンで貼らせてもらいました(^-^;
 たまには短髪主役も良いと思うんですが 相方がウンと言いません(笑)

筍屋 takenokoya@yahoo.co.jp

竹藪館 <http://www.hi-ho.ne.jp/su-oh/keikaku.htm>
 (御意見 御感想ありましたら宜しくお願いします)

はじめまして&おひさしぶりです。
 へたれ文字書きのた～んけーです m(_ _)m

猛暑を乗り切る一助にと思い、
 涼くなる系の夏っぽい本にするはずが、
 なぜこういう結果になったのか。
 まさにミステリーですね。
 作中の素敵な道具の数々は、一応空想の産物です。
 (『綱の友情』以外は筍屋さんの脳内から出てきました)
 …お台場あたりで、ああいう道具を使った『少年秘宝館』やってくれないですかね。

短髪君については、個人的には確かに積極的ではないですね。そういえば(^-^;
 ただ、決してNGなワケではありませんので、きついつか。

どこか一場面でも、皆さんの琴線に触れられたら幸いです。

2010年8月15日 た～んけー
 turn_k_vf@yahoo.co.jp

秘宝少年

2010年8月15日 初版発行
 発行/筍御飯&ぶあいふあむ
 著者/筍屋&た～んけー
 印刷所/株式会社 プロス(本文)
 関西美術印刷株式会社(表紙)
 連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp



2010 SUMMER



筍御飯
&
ぶあいふあむ